

## 週報

## こひつじ

第40巻 27号  
 大津キリスト教会  
 菊池郡大津町室 119  
 TEL 096-293-4470  
 FAX 096-293-4961  
 牧師 米村 英二

## 愛は一切に勝つ

## その三 与える愛か、求める愛か

C・S・ルイスは言う。

愛には二種類があると。求めるはだれも持っていない(ヨハネ一五の二三)

与える愛は奉仕の愛だ。それに對して求める愛は、子どもが不安である。

や恐れの中で保護を求め、母親の腕のなかに抱かれないと願う、そういう愛である。

与える愛と求める愛とは、ど

ちらが神の愛に近いか、と問われるなら、当然、与える愛であると私たちが答えるだろう。

一般に、与える愛こそは、もつ

とも崇高な愛だと考えられている。聖書もそう言っている。

「人がその友のためにいのちを捨

兄は父のもとで忠実に奉仕の

日々を送っている。弟は父のもとを離れ、一度は放蕩に身を崩すが、その罪を悔い、ゆるしを求め、ただ父にすがります。

兄にあるのは与える愛だ。それに対して弟には、求める愛のほか何もない。

弟は、父に、こう言う。

「おとうさん。私は天に對して罪を犯し、またあなたの前を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません」

ただ憐れみとゆるしを乞う弟の言葉は、父の心を深く動かすのである。

求める愛は、何の奉仕もしない。与えるものは何もないのだから。

ただゆるしと憐れみを求める。それなのに、神は、そのような弟に近さを感じられるのである。

神に對して、「私は乞食ではない。私は私心なく、あなたを愛する」

と、もし私たちが言うなら、それはうぬぼれた、ずうずうしい態度の人間にしか神には映らないだろう。

与える愛を日々実践している人

であっても、神と交わる時は、遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ一八の一三)

と折った、あの取税人のような心の態度が求められるのではないだろうか。

このように、一見、利己的と思われる「求める愛」が私たちに近るとき、私たちはもつとも神に近いのである。

それに比べ、「与える愛」は、神の愛に似ているにもかかわらず、神から遠く離れている場合が少なくない。

このたとえに登場する兄の父への愛は、与える愛だ。彼は、父から一度も離れたことがなく、忠実に父に仕えてきた。そういう意味で彼はもつとも近く父のもとにはたはずである。

彼の表現を借りると、彼と父との関係は以下のような感じだ。「ご覧なさい。長年の間、私はお

とうさんに仕え、戒めを破ったこ

とは一度もありません」

彼は「長年の間」と言う。「おとうさんに仕えた」と言う。「戒めを破ったことは一度もありません」と言う。

にもかかわらず、

「その私には、友だちと楽しめと言つて、子山羊一匹下さつたことありません」

と言つた瞬間に、彼は、自分の体は近くあつても、心は父から遠く離れていることを露呈したのである。

したがって神がわれわれに求めておられるのは、奉仕ではない。伝道ではない。

むしろ多くの場合、教会が奉仕や伝道中心主義に陥るとき、いつもお互いが傷つけ合うのではないか。

マルタもイエスに奉仕した。しかし彼女が奉仕中心主義になつていったとき、妹のマリアを批判し、イエスに、その不満をぶつけてしまふのである。

「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思ひにならないのでしょうか。私の手

伝いをするように、妹におつしや

「どうぞください」(ルカ一〇の四〇)では、神を愛することが神のために働くことでないとすれば、われわれに求められていることとは何か。

マリヤのようにイエスの足もとにひれふし、神の愛に浴することである。

ただ神の愛に満たされたとき、人はみな神のほか何もいらぬ充足した人間になるだろう。そのとき心にゆとりが生まれ、そのゆとりから他者への愛は放出されてゆくのではないだろうか。

そしてその愛の放出はいつも小

さなことから始まる。たとえばヒルテイの次の助言のように。「人のために大いに役立つ機会はそんなにあるものではない。しかし、だれかにささやかな喜びをあたえることなら、いつでもできる。

たとえそれが親愛の情をこめて挨拶するといったことにすぎないとしても」(終)

\*\*\*\*\* 今日の日礼拝 \*\*\*\*\*

○第一礼拝は午前一〇時から、第二礼拝は午前一一時から。

○教会学校は午前一〇時から。

○説教は坂田壮一さん。

### 先週の礼拝

\*\*\*\*\* 司会は合志文利さん、奏楽は吉岡裕美さん。説教は「和解と離別」と題して「こうしてダビデは自分の旅を続け、サウルは自分の家へ帰つて行った」(一サムエル二六の二五)の聖句から語りました。

### 先週の出席

\*\*\*\*\* 第一礼拝が四九名、第二が三三名、合計八二名(男二六、女五六)、それに子どもが四名。合計八六名でした。

### 感謝の便り

\*\*\*\*\* 私たちのお世話を、ありがとう。サンネはとくに新幹線が楽しかったようです。関西空港で二時間ほど休んで、ヘルシンキ行き飛行機に乗り、寒いアムステルダム

空港にぶじ着きました。外は雨、気温は一二度。空港では私たちのために「お帰りなさいパーティ」があるそうです。

滞在中の、とてつもなくすばらしいあなたがたのおもてなしに感謝しています。

\*\*\*\*\* ビル・モーレンカンブ \*\*\*\*\*

### 落成式

\*\*\*\*\* 七月五日(金)は、宮崎県都市で前田佳良子さんが経営する会社(ガブレス)の農場が完成し、その落成式に招かれ、妻といっしょに出かけました。

式はキリスト教式で行なわれ、したので、聖書の言葉を語り、祝福をさせていただきました。養豚農場ですが、その近代的設備には驚きました。ちなみに会社名「ガブレス」は、英語の「God Bless」からとつたものです。その名のとおり、これからの農場経営を神が祝福してくださるようにお祈りください。帰りは霧島を回りました。そこから見える鹿児島湾と桜島がとてきれいでした。